

## 第2回 学校協議会記録

### 会議録

進行 浅田教頭  
記録 池永

議題 平成23年度 第2回 学校協議会  
開催日時 平成23年12月17日 午後4時  
開催場所 本校 応接室  
出席者 〔委員〕 浅野委員 入江委員 北浦委員  
芝井委員 立石委員 宮坂委員  
〔学校〕 松本（校長） 浅田（教頭） 梅谷（事務長）  
山本（首席・学校運営室長） 奥谷（首席・生活指導室長）  
高田（学習指導室長）

#### 1. 学校長挨拶

##### 校長

今回のテーマは「学校力の育成」である。  
来年、槻の木高校もいよいよ十周年を迎える。生徒の進学実績を見ると、5期で飛躍、6期は横ばい、7期もほぼ同様の予想がされている。さらなる飛躍を迎えられるよう、施策に取り組んで行きたいと思う。高い進学実績を上げている他府県の公立高校へ、教職員の視察を実施している。参考になることは吸収し、一歩ずつ取り組んで行きたい。

#### 2. 座長選出（座長あいさつ）

本校 PTA 現会長 北浦義己委員を選出した。

##### 北浦委員

多忙にもかかわらずご参集感謝する。寒い中、熱い議論を期待する。

#### 3. 報告・協議

##### 教頭

それでは山本首席より報告がある。タイトルは「学校力を高めるために～生徒の意欲向上と教師の力量形成から～」である。

## 【報告】

山本首席

(槻の木ノートに関して)

今年度の新たな取り組みとして、「槻の木ノート」の作成とノート指導がある。今年度の1年生に30冊を持たせ、週末課題や授業に活用している。これは基本的にルーズリーフやプリントの使用を押さえ、学習指導の核をノート指導にしようという趣旨である。

富山県立高岡高校を視察した際、学習プリントの添削に力を注いでいたのが特に印象的であった。各教科の教員が生徒のプリントを赤ペンで添削し、クラスボックスに返却する。生徒はプリントを束にして大学入試の試験会場へ持参するのである。プリントの束は生徒の頑張った証であり、生徒達は「お守り」代わりにしている。高岡高校の取り組みに触発された。

また、生徒の学習に対する「よろこび」、「うれしさ」はどこから来るのであろうか。その一つは達成感を得られた時であり、大学ノート一冊を1ページから最後まで自分の書いた文字で埋め尽くしたなら、大きな達成感を得られるのは確かである。すでに30冊を使い切った生徒も出てきた。彼らにとって1冊、1冊仕上げるのが大きな自信につながると確信している。

1年生の教科担当の申し合わせ事項で、週末課題を添削する際、できる限り肉筆でコメントを入れるようにしている。単に検印を押すだけではなく、ノートを通じ生徒とのコミュニケーションを図るのである。小学校の連絡帳のようだが、「先生が見てくれている」と感じることは生徒にとって大きな安心感となり、生徒と教師との信頼関係も育まれる。2年生になれば、「槻の木ノート」の継続使用は強制しないが、本校に入学して来た生徒が1年次に使用することはこれからも継続してゆく。

(自習活動の重視)

本校の取り組みとして「一日勉強会」を8時から6時まで9時間、勉強をする部屋では「寝ない」、「休まない」、「勉強に集中する」ことを原則に行ってきた。関西大学の高槻キャンパス「高岳館」では「勉強合宿」を行っているが、今後は「勉強合宿」の回数を減らし、一日勉強会に力を入れたい。12月30日には195名、1月4日には69名の参加希望者がいる。特別講習も入れ、内容を充実してゆく。

(大学の就職活動)

「就職氷河期」と言われて久しいが、大学時代に頑張った生徒と、そうでなかった生徒との2極分化が著しい。企業から求められる人材は何社からも内定をもらい、入社を望まれている。生徒達が将来直面する厳しい現実をふまえ、いかに求められる人材となるかを考えさせたい。「第2回槻の木学びカフェ」ではベネッセの方が大学生とパネルディスカッションの形式で、就職活動の現状を浮き彫りにする。

(若手教職員育成)

若手教職員対象の「スキルアップセミナー」を開催、教頭と各室長が講師を行い、5回シリーズで行った。テーマは各自が設定し、好評であった。

(1年学年団の取り組み)

「弱点克服整理ファイル」を作り、定期考査を保管させ、間違っただ箇所を徹底的に調べさせている。

校長

今回の「学びカフェ」は参加者に本来の意味のキャリア教育について考えてもらう良い機会である。「スキルアップセミナー」は次世代の育成もめざしている。

【協議】

(槻の木ノートに関して)

浅野委員

「槻の木ノート」導入によって、授業は変わったのか？ノート中心の授業にすれば、プリントを用いないから、「伝える」内容を厳選しなければならない。

山本首席

課題にコメントを書くことは大変だが、やりがいがある。生徒はほとんどが真面目に取り組んでいる。また、生徒がノートに記入した内容を題材に教職員が議論を持つことができ、有効である。

浅野委員

ノートのコメントを通して生徒をほめることができ、ノート指導を通じ学び方を教えられ、生徒が達成感を得られる。教職員の議論の道具にもなり、さらに、保護者が見ることにより、家庭におけるコミュニケーションが活性化できる。「槻の木ノート」は優れている。よく似た例として、埼玉県立浦和高校では学校で活躍した生徒へ「葉書表彰状」を郵送している。葉書であるから親が見ることができ、親子の会話が弾む。

北浦委員

出来れば全学年で「槻の木ノート」を使用して欲しい。「槻の木スピリッツ」が育まれるから。

芝井委員

多少金額がかかっても良いのではなかろうか。

宮坂委員

槻の木高校は学習指導の一環として、「ノートの取り方」に力を入れているが、上手にノートをとる子どもの例を他の生徒に共有させれば良いと思う。富山県立高岡高校のPTA主催進路研修会の内容で、生徒の学力向上の手法として、

1. 勉強を習慣化し、「勉強することが当たり前である」という認識を生徒に徹底させる。
2. クラブ活動にしっかりと参加させる。
3. なるべく学校で勉強をし、家庭に持ち帰らない。
4. 授業を無駄にしない。
5. 塾や予備校に頼らない。
6. 定期考査やテストを学力向上に利用する。

槻の木高校の行っている「弱点克服ファイル」は、まさに「6. 定期考査やテストを学力向上に利用する。」に当てはまり、本当の力が育成される立派なものだと思う。

(自習活動の重視)

芝井委員

大学生も本を読んでいないと感じることが多い。読書量が少ないと広い意味での情報の処理ができない。

北浦委員

生徒の読書習慣を喚起するため、PTAの委員さんをお願いし、クラス図書を設置するために「一人一冊運動」を呼びかけた。

宮坂委員

「槻の木高校」は色々な取り組みを行っており、すごい学校であると感じる。中学校と連携し、教育方法が一致するよう、どんな教育を行っているか一緒に話し合う機会があれば良いと思う。大学に入れば「リベラルアーツ」という言葉が示すよう、教養を高めるため、本と対談するように読書するなど、色々な取り組みがある。

また、高校においては先生方が単に授業をするのではなく、教材作成に苦勞したことも話しながら、「何をうったえたいのか」根っ子の部分を生徒に伝えることが有効であると感じる。

芝井委員

生徒の作文力に関して、鳥取の中学校では本の推薦文コンテストを実施している。読書感想文よりも、書きやすいのかも知れない。また、大学においては生徒に商品のキャッチコピーを書かせている。新製品の販売促進を想定し、「女子高生に売れる製品のキャッチコピーを書きなさい」という課題を生徒は熱中してこなしている。

教頭

生徒の論作文を添削しているが、「書く習慣」が十分ではないので、生徒達は苦勞している。

立石委員

「本は自分で買って読むもの」という概念が最近の生徒の間に広まっているので、図書館の使用率は減少しているのではなからうか。また、先ほど述べられていたが、教師が教材を準備する背景を生徒に話すことは大切であると思う。

高田室長

本校は沢山の本を譲り受けたので、蔵書はかなりあるが、古い書籍が多い。本当に本が好きな読書家の数は少ないと思う。入学時にオリエンテーションを実施しており、その直後は貸し出し数が増えるが、それ以降の増加は望めない。図書委員に予算で購入できる図書を選ばせている。図書室が閉館している学校もあるそうだが、「読む力」と「書く力」は脳内に映像を描くベースの力となるので、大変重要である。

(大学の就職活動)

芝井委員

「キャリア教育」は継続的な取り組みが大切である。関西大学では保護者向けの就職説明会を実施しているが、大学1年生、2年生の保護者の参加も多い。週刊東洋経済で紹介された「大学キャリアセンターのぶっちゃけ話 知的現場主義の就職活動」(沢田健太著・ソフトバンク新書)は、現場をよく理解した人が書いていて参考になるので保護者に一読を勧めている。

北浦委員

生徒の進路に対する自信が持てない保護者も多いと感じる。保護者が「キャリア教育」を理解し、現状に対して正しい認識をもってもらいたい。

芝井委員

保護者会で大学生の先輩からの話を聞くのはどうであろうか。

山本首席

卒業生の合格体験記作文集があるが、内容が非常に良い。保護者にも是非読んでもらいたい。

教頭

第2回学校協議会資料の〈今年の新たな取り組み〉に示してある、

1. 槻の木ノート作成とノート指導
2. 一日勉強会への指導強化  
は生徒の学力向上に対する取り組みであり、
3. 大学進学後、就職活動時のための進路指導の追求  
は保護者向けであり、
4. 若手教員研修  
は教職員の育成である。

若手教員を含めた教職員全体の育成についてはいかがでしょうか。

(若手教職員育成)

浅野委員

キンビールでは入社2年目の社員が新入社員の面倒を見る。若手のベテランが若手を育成するのである。

教頭

昔は同期の数も多かったが、最近の教職員は同期の数が少なく、お互い切磋琢磨し、成長する機会も少なくなった。

浅野委員

若手はベテランの技量を盗み、技量を高めて行く。

山本首席

今年の夏に「出前授業」で、高槻1中の教室を借りたが、HR教室の掲示物の提示の仕方など、多くの工夫がこらされていて大変勉強になった。若手もベテラン教師の学級経営を見て、多くのものを吸収して欲しい。

入江委員

小学校の方がさらに多くの工夫がこらされている。

山本首席

橋本知事が来校した際、講師の先生に司会を務めてもらった。早朝から発声練習をしたり、大変な努力をしたが、本人にとって大きな自信を得る機会となった。

(1年学年団の取り組み)

芝井委員

1年次に生徒の学習習慣をつけさせるのは大変だが、「教科書」を読み、「参考書」を使いこなし、自学自習できる態度を育成する事は大切で、さらに進めて、生徒が自ら「教材」を作成できる段階になれば、素晴らしいであろう。「弱点克服ファイル」では特に「世界史」が、よく復習できている。継続的にこのファイルを使い、知識の「点」を「線」にかえていければ良いと思う。

校長

考査の点検は今までやっていたが、本格的な取り組みは今年からである。

教頭

最後に提言を頂きたい。

【提言】

浅野委員

槻の木高校はこれからも生徒の力量を高めるフォーム「入れ物」を作り、生徒と教師の育成に力を注いで欲しい。

入江委員

槻の木高校の取り組みは有意義である。「ノートをとる」、「参考書で調べ」、「問題を解き」、「赤ペンで書き込む」、このプロセスは勉強の証となる。高槻一中でも朝の 10 分間読書を実施し、今年で 4 年目になるが、良い方向に向いている。生徒が読書の習慣を身につける良いきっかけとなっている。また、ノートの書き方の指導、板書事項の整理は非常に大切である。また、時間短縮を望むなら、電子黒板の様な電子機器を使用することも考えられる。

教職員の育成に関しては、幼稚園、小学校、中学校は「異校種間研修」を行っている。高校でも行ってみたいかどうか。キャリア教育推進に関しては、企業とタイアップし、生徒がスポーツ用品の作成に取り組んでいる。どの生徒も熱中している。

北浦委員

PTA を機能的にし、さらに活性化し、学校の教育活動を応援して行きたい。

芝井委員

授業において、先生方が教材を教える目的、意図を明確に提示することは大切である。生徒に「自分の成長に責任を持たなければならない」というメッセージを送ることは重要で、できれば保護者にも発信して欲しい。

立石委員

学校協議会の内容と槻の木高校の取り組みに感激している。特に「弱点克服整理ファイル」は素晴らしい。

## 宮坂委員

府立高校入試の結果を見れば、受験生の読解力が低下していることは明らかである。槻の木高校は「文武両道」の真意を考えてもらいたい。授業以外にも行事、クラブなど多くの教育活動があり、それらすべてがいかに生徒の将来につながるかを見つめ直して欲しい。また、槻の木高校の取り組みは大変立派で、今は普通科単位制の学校であるが、もっと良いスタイルがあるのではなかろうか。例えば中高一貫の学校や、クリエイティブスクールなど、システムの新しい展開を考えてもらいたい。

## 校長

生徒は大学訪問を行っているが、高校での学びにつなげるため、7年後を見すえた企業訪問も考えてはどうかと思っている。